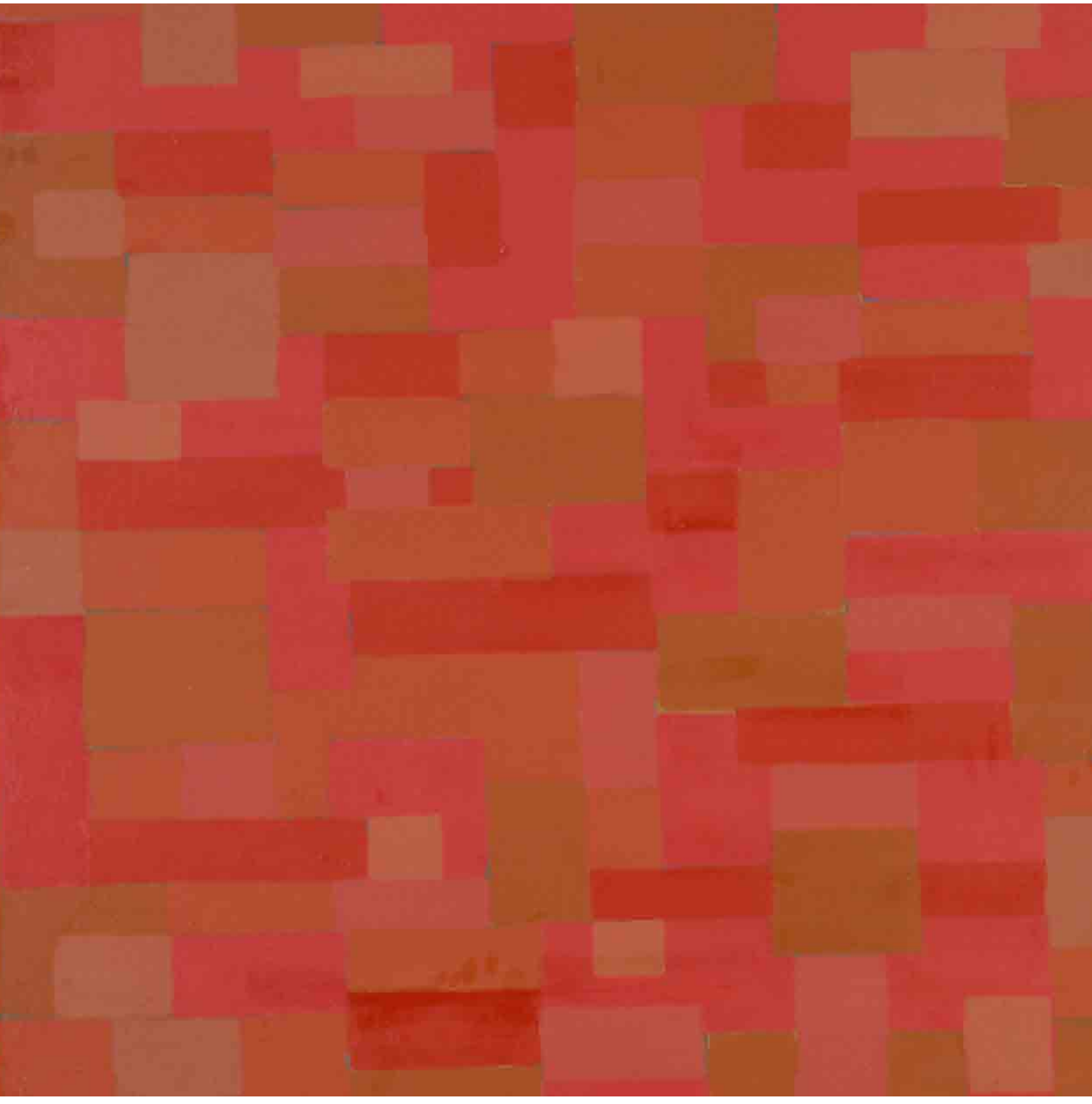
AICHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会 会報 第57号

空中回廊

コレクション展紹介：当館の西洋近代名品にみるオールドマスターの受容と再創造
—「馬」を描いた絵画をめぐって—
会員のひろば：企画展鑑賞会・友の会講座・懇親日帰りツアーレポート
収蔵庫から：アド・ラインハート《No.114》
平瀬礼太新館長から・活動紹介ほか



アド・ラインハート《No.114》部分　愛知県美術館

当館の西洋近代名品にみるオールドマスターの受容と再創造
―「馬」を描いた絵画をめぐって―

第３期コレクション展では、西洋近代の油彩画を中心に展示する予定です。西洋美術では伝統的に、権力者の統治の象徴として騎馬像が多く表され、その中で理想的な馬の形が追求されてきました。過去の優れた美術はモダニズムの美術にとっても重要なインスピレーション源でしたが、そこには、こうした「馬」のイメージも含まれていました。本稿では、第３期コレクション展で展示する「馬」が描かれた作品に光をあて、西洋近代絵画におけるオールドマスター（１８世紀以前の巨匠またはその作品）の受容と再創造の一端について考えます。

まずは、当館の顔であるクリムトの《人生は戦いなり（黄金の騎士）》（1903年）を取り上げてみましょう。この絵には、画面左端から顔を出す蛇には目もくれず花野を前進する、黒馬の騎士が描かれています。この絵は、当館にも所蔵されるデューラー《騎士と死と悪魔》（1513年）に基づくことが知られています。クリムトは、デューラーの描く騎士に、近代という時代に即した新しい芸術を追求する自身をなぞらえたのだと考えられています。実際に両作品は、真横から騎馬を捉える構図やどっしりと太い馬の頸の形がよく似ています。ただし、デューラーの馬が対角線上の脚を前に出すのに対して、クリムトの馬は、いずれも右側の脚を前に出しています。

デューラーは、馬の歩みの運動や画面の奥行を表すために、レオナルドを手本に馬の脚の位置を工夫しました。クリムトの絵はより平面的に見えますが、それは、クリムトが自然主義的な再現性に捉われない表現を求めたためでしょう。騎士の甲冑の平坦な金地、兜や手綱のモザイクのような市松模様、金が散らされた背景は、ビザンチン美術の装飾性を思わせます。クリムトはこの絵で、様々な時代の美術を巧みに再構築し、自らの様式にまとめあげたのです。

クリムトの絵と好対照をなすのが、バルテュスの《白馬の上の女曲馬師》（1941年）です。クリムトの黒馬が左を向くのに対し、バルテュスの白馬は右を向き、いかめしい騎士ではなく少女を背に乗せています。女曲馬師は19世紀末から20世紀前半のモダニズム絵画のなかでしばしば表されてきました。例えば、新印象主義の画家スーラは、サーカス場を躍動する白馬と女曲馬師をダイナミックなポーズで描き出しています。一方で、同じサーカスの花形を描いたバルテュスの絵は、静的な印象を与えます。

横向きで描かれた白馬は、片方の前脚を上げて三本の脚で立っています。このポーズは、《マルクス・アウレリウス帝騎馬像》に遡る、西洋で最も古典的な騎馬のイメージにみられるものです。この絵の典拠は明らかではありませんが、建築物の構造に依拠した幾何学的な空間表現や人馬を形作る簡潔な肉付けは、バルテュスが好んだマザッチョやピエロ・デラ・フランチェスカなどの絵画を思わせます。こうしたイタリア初期ルネサンス美術への関心を反映しつつ、複雑な陰影を織りなす光の表現を加えることで、バルテュスは、静け

グスタフ・クリムト《人生は戦いなり（黄金の騎士）》1903年
油彩・テンペラ・金箔、画布、100.0×100.0㎝、愛知県美術館

さに満ちた神秘的な空間を作り出しています。その中で、女曲馬師としての少女は光を受けて、聖なる者のような存在感を放っています。

バルテュスと同時期に活躍したシュルレアリスムの画家マックス・エルンストは、レンブラントによる《ポーランドの騎手》（1655年頃）に着想を得て《ポーランドの騎士》（1954年）を描きました。ただし、エルンストの絵画は、半ば口を開いた馬の横顔以外には元となった作品の面影が読み取れないほど、大胆に再創造されています。騎手の姿は省略され、肩に一羽の鳥を乗せた白馬が、人間のように前足を折り曲げて二羽の鳥を抱いています。鳥のカップルには、エルンスト自身とパートナーが重ねられていたと考えられます。レンブラントの絵画において、エルンストが特に注目したのは、背景の台地状の岩山でした。岩山の斜面を、レンブラントは厚塗りの素早い筆致で表しましたが、エルンストは、青いデカルコマニーの複雑な絵の具面によって、隆起する稜線を繊細に表現しています。絵具が乾く前に板を当てて剥がすことで不規則なまだら模様を生むデカルコマニーは、エルンストの画業後半を象徴する技法のひとつでした。この絵では、デカルコマニーの色面を、メインモティーフを構成する切子面状の色面のなかにも組み入れることで、地と図が交錯する、独特な空間が作られています。

このように近代には、過去の美術から着想を得ながら、多様な技法とアイデアでそれらを再構成することにより、新しく唯一無二の表現が生み出されてきました。当館の所蔵する西洋近代絵画の多くが、そうした華麗な再創造の過程を垣間見せてくれます。ここでは特に「馬」が描かれた絵画を取り上げましたが、今年3月に新収蔵し4月から公開しているレオノーラ・キャリントンによる《ウルでの狩り》（1946年頃）にも、騎馬が描かれています。この作品では、古代メソポタミアを舞台に、馬を駆る不思議な生き物が鹿を仕留める様子が、幻想的に表されています。巨大な鹿が血を吹く描写はひと際目を引きますが、そのそばで様々な表情を見せる騎馬の群れにも、ぜひご注目ください。

愛知県美術館学芸員　岩間美佳

会員のひろば

今年のテーマは
「友の会 30 年の縁～お世話になった方々に逢う」です！

友の会 30 周年記念のイベントをご報告します！

木本館長が熱弁をふるってくださいました

★ 企画展鑑賞会

2024 年 6 月 2 日（日）

企画展：「春陽会誕生 100 年それぞれの闘い」展
会　場：碧南市藤井達吉現代美術館

「お世話になった方々に逢う」の第一弾は、碧南市藤井達吉現代美術館館長の「木本文平館長に逢いに行く」です。木本館長は元愛知県美術館副館長であり、友の会の会報『空中回廊』にご寄稿いただいたこともあります。春陽会の主要メンバーのこと、展覧会の内容はもちろんのこと、碧南市や美術館経営など「ここだけの話」をたっぷりお聞かせいただきました。

今回も近隣マップを配布していただきました！作品を観たあとは地図を片手に散策です。会員どうし、「美味しいもの」の情報交換に余念がありません。碧南市には立派な仏閣や古い建物が多く、また何となくおおらかな雰囲気があります。次の企画展は松本竣介がメイン。次回もマップを忘れずご持参ください！

★ 友の会講座

2024 年 6 月 23 日（日）13：30 ～ 15：00

演題　仏教美術へのアプローチ
講師　深山　孝彰 氏（愛知県美術館副館長兼企画業務課長）

今年度テーマの第二弾では、副館長兼企画業務課長の深山孝彰氏に仏教美術についてお話いただきました。深山さんには友の会運営でも、陰になり日向になりご協力いただいています。2021年のコロナ禍で友の会活動の企画に苦慮していた中、動画配信にご協力いただきました。佐藤香菜さんをお招きしての「アーティストトーク」という形でしたが、撮影というものに不慣れで右往左往し準備していた企画者たちを優しく見守ってくださっていたのが思い出されます。

仏教美術へのアプローチとして、特に仏像に絞り造形の変化をメインにお話いただきました。なぜそのつくりになったのかを、お釈迦様のこと、世の流れ、人々の仏様に対する思いといった視点から解説していただいています。更にこれまで担当された展覧会の裏話、学生時代の八丈島での研究エピソードもあり、終始ニコニコ、ワクワクして聞き入りました。

仏教美術に触れる度に振り返りたい、軸となるようなお話。普段の動画は期間限定なのですが、この講座はアーカイブとして残していただけるよう希望いたします！

懇親日帰りバスツアー　2024年6月29日（土）

大阪中之島美術館「木下佳通代」展の鑑賞と中村史子学芸員の解説（昼食付き）

今年度のテーマ第3弾は「中村史子先生に会いに行く！」と銘打ち企画しました。大阪中之島美術館がある一帯は交通の便もよく、個人で訪ねても満喫できるエリア。しかし友の会で企画するからには、と「ご縁」を最大限に活かしてスケジュールを組みました。中村さん、大変お世話になりました！

08：00　出発

早朝で小雨でしたが、予定通り出発進行！

バスの中にて

ちょっとしたお楽しみ。お土産の中に「くじ」を仕込みました。当たった方には粗品を進呈。

到着後はランチ！

中村さんに一言いただいてから、リーガロイヤルホテル直営店が供するランチに舌鼓をうちました。広々とした会場で眺望を楽しむこともできました。

中村さんの講義

木下佳通代展の解説だけでなく、大阪中之島美術館のエピソードもご紹介いただきました。お隣の国立国際美術館には元愛知県美術館の館長の島敦氏が館長としていらして、「梅津庸一クリスタルパレス展」（梅津庸一氏は2016年度ARCHvol.20で中村さん担当）が開催中…。30周年、6月に行ったのは正解でした！

会員の声

●中村さんにお会いできてよかった（50歳代）

●昼食に学芸員さんのお話をきかせていただき展覧会を観れたことは様々な感じ方・見方となる指針となったため有難い講義でした。（40歳代）

●展覧会と中村さんの話を通して木下さんの作品が彼女の存在・知覚・認識についての哲学的信念にうら打ちされているのだと知りました。（60歳代）

中之島美術館へ

堂島川の遊歩道で川辺の景色を楽しみつつ、中村さんと美術館へ。

木下佳通代展の感想

●思った以上によくて、とても感動しました。知らない作家だからと軽く考えていてごめんなさい。折った紙からの発想の飛躍、そのデザイン的感覚の鋭さ、とても好きでした。（70歳代）

●初期から晩年までの作風の変化が見ていて飽きなかった。事前に中村学芸員から、存在への問い、見えないものを認識させることへの関心を持ち続けた作家と、レクチャして頂いたので、変化する作風の根底にあるものと視ることが出来、理解が深まりよかったです。（60歳代）

●時空の不連続や理想と現実の様なイメージを連想させられ、脳を大いに刺激された（60歳代）

●美術館の大きさに負けない大きな画面に芸術と認識について作品に昇華させた生涯に感動しました。（70歳代）

・中村さんにヤノベケンジの猫のことなどにもふれてもらって意味がわかりありがたかったです（70歳代）

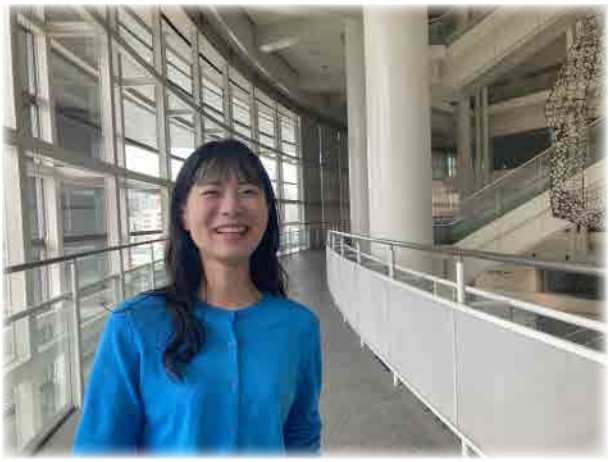
16：00　集合

集合時間ぴったり！

19：00栄　帰着

ご協力ありがとうございました！

2024年度 新学芸員紹介　ようこそ愛知県美術館へ



岩間美佳（いわま みか） - Iwama Mika -

友の会の皆さま、初めまして。4月より愛知県美術館に赴任いたしました、岩間美佳と申します。大学院では、岸田劉生や恩地孝四郎など大正期に活躍した洋画家について、特に学んでまいりました。上記の二人の画家もふくめ、日本近代美術史を彩る代表的な作家の作品を豊富にコレクションする愛知県美術館は、私にとって憧れの美術館でした。着任してからは、江戸時代の古美術から西洋近現代の名品までカバーする幅広いコレクションに、日々心を躍らせております。まだまだ頼りないですが、少しでも早く、当館の豊富なコレクションについて見識を深め、一人前の学芸員になれるように頑張ってまいります。皆さまと一緒に、美術館の魅力を発信してまいれましたら嬉しいです。これから、よろしくお願いいたします。

白鞘南海（しらさや みなみ） - Shirasaya Minami -

初めまして。本年度4月から愛知県美術館で勤務しております、白鞘南海です。清流の国岐阜で生まれ育ち、大学で愛知に出て、そのまま当館に就職しました。大学・大学院では19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍した工芸家、エミール・ガレを研究しており、各地にあるガレの作品を求めて国内外の美術館を巡っていました。修士2年生のとき、論文の締切り一か月前に、一人でガレの出身地であり生涯の活動の拠点でもあったフランスのナンシーという町に行き、拙いフランス語と英語を駆使しながら調査をさせてもらったのはいい思い出です。今後は研究で培った語学力と研究手法を活かして、ひろく西洋近代美術を中心に勉強していきたいと思っています。

旅が趣味で、大学院の卒業旅行では日本一周（北海道と沖縄を除く）に行ってきました。皆さま知られざるおすすめの旅行先をご存じでしたら教えてください。これからどうぞよろしくお願いいたします。

収蔵庫から
深く知るともっと見えてくる

アド・ラインハート（1913－1967）《No. 114》

1950年　油彩　画布　152.4 x 101.9 cm 愛知県美術館蔵

アド・ラインハート《No. 114》1950 年

赤や黄土色などを基調にしたレンガのような無数の長方形や正方形の矩形が、画面を覆うように描かれています。どれが手前で、どれが奥なのか、私たちの視点は定まらず、上下左右、奥行きの感覚までもが揺れ動き、画面を漂い続けます。タイトルには「No. 114」という無機質な番号が与えられ、具体的な意味や物体を示唆する要素は慎重に排除されています。

第二次大戦後のニューヨークでは、多くの画家たちが抽象絵画の新たな可能性を切り拓いていました。その中で、アド・ラインハートはおそらく最も徹底的に「絵画の純粋化」を追求した一人です。1930年代前半に大学で美術史を学んだ彼は、キュビスムやピート・モンドリアンなどのモダンアートを吸収しながら、早くも30年代の後半には抽象的な絵画を描き始めました。ここで紹介する《No. 114》は、1940年代末頃、赤や青のモノクロームを基調に、画面全体に矩形を配置した一連の作品の一つです。以後も彼の作品は、ますます厳格な幾何学的様式をとるようになり、最終的には「ブラック・ペインティング」と呼ばれる、一見したところ黒一色で描かれているようにしか見えない、抽象絵画の極北とも呼ぶべき作品群に至ります。

ラインハートにとって、芸術とは日常的な現実から切り離されたものでなければなりませんでした。その純粋化への姿勢は、決して妥協のないものでした。1957年に彼が書いた文章では、絵画制作において「避けるべき」要素を次々と挙げています。「筆触があってはならない」「形があってはならない」「色彩があってはならない」「光があってはならない」「空間があってはならない」「時間があってはならない」「物体も主題もあってはならない」など。これほどの禁欲的なルールは、芸術を窮屈で制約の多いものにするかもしれません。しかし、逆説的ですが、彼の目的は「最も自由な芸術上の自由のための最も厳格な方法」を探究することだったのです。

ラインハートは、芸術は「時間を超越する」ものだと考えていましたが、そのあまりにも徹底した思考と作品制作は、かえって強く彼自身という存在や彼が生きた時代と結びついているようにも見えます。形も矩形のみ、色もほぼ赤一色に限定されたこの《No. 114》は、彼の妥協のない芸術上の探究における一つの過程を示す、重要な1点です。

学芸員の横顔
塩津青夏
-Shiotsu Seika-
愛知県美術館主任学芸員

2010年より愛知県美術館に勤務。2017年から2023年まで国際芸術祭推進室。2023年4月より愛知県美術館に戻り、現在は友の会の担当業務も行っています。専門は戦後アメリカの抽象絵画。

AICHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART

MEMBERSHIP

平瀬礼太 新館長から

館長、と称されて、間違いではないのでしょうが、少々困惑いたします。干潮のことであろうか、それとも役所だから官庁の間違いではないのか、はてまた、小さい頃に憧れた間諜にようやくなれたのか、などと記したくなるのは、関西に長く住んでいたからと言い訳してしまいそうですが、まあそんなことはなく、性分なのでしょう。ステーキの館というレストランに何度か行きましたが、その館長ならステーキなだけに素敵だな、なんて、もういい加減止めた方がいいですね。

就任早々、当館及び愛知県陶磁美術館の独立行政法人化検討のニュースが周囲を駆けめぐりました。そういえば、愛知県美術館の開館より既に30年以上が過ぎています。社会情勢も開館当初からは大きく変化しています。うつろいゆく月日のあらがい難き流れに従って、わたしたちもたたずまいを改めねばならぬところ少なくなしということなのでしょう。

先の組織の形がどうあれ、美術館はそのやるべきことをやり、多くの方々にその存在を理解していただき、様々な形で利用していただくように努めるのみです。限りある人的、経済的資源の中で、どれだけそれを社会の変化の中で活かせるのかを日々考える必要があります。変化が重要というよりも、状況に応じて変えねばならないところ、変える必要のないところ、変えてはいけないところが共存するのが現実だと思います。

正直に言いまして、このような変革の時期のこのポジションは荷が重い、と感じるところがあります。とはいえ、そんなことを考える暇があるならば、より良くなる方向へ向かうべきだと考えています。精進するという言葉はこんなときに使う言葉なのでしょう。

美術館は、当然のことながら支えてくださる多くの方々がいることで成り立っています。そして友の会の皆様にはいつも美術館を支えていただいています。そのようなご支援に応えるべく、よりよい美術館となるように努めていきたいと思っています。

どうぞよろしくお願いいたします。　　館長　平瀬礼太

編集後記

今年度の友の会テーマは「縁」ですが、自身の生活でも「縁」が大きな顔をしていると気づきました。友の会の「縁」は真面目にコツコツ続けてきたから、の果実だと理解しています。一方、自分のは？「因果応報」とならないように足元をみつめたいものです。

□編集　松下智子
喜田泉／小林克敏／田中寛／逸見仁
□協力　愛知県美術館
□発行　2024年11月
Art Direction:Masaru Nakada Design & Layout: Katsutoshi Kobayashi

定例活動　2024年4月～2024年9月

所蔵品管理（読み下し）	モニター	発送	受付［講座イベント］	広報	ホームページ	理事会
0回（6回）	1回	3回	6回	10回	随時更新	6回

友の会活動紹介　2024年4月～2024年10月　★中面で紹介

5月
- 特別鑑賞会「コスチュームジュエリー」展
  → 動画配信（会期中）

6月
- 企画展鑑賞会　碧南市藤井達吉現代美術館
  「春陽会100年　それぞれの闘い」展★
- 2024年度総会
- 記念講演会　平瀬礼太館長　→　動画配信
- 友の会講座「仏教美術へのアプローチ」★
  深山孝彰副館長　→　動画配信
- 懇親日帰りバスツアー
  大阪方面★

7月
- 定例活動のみ

8月
- 特別鑑賞会「アブソリュート・チェアーズ」展

9月
- 定例活動のみ

10月
- 特別鑑賞会「相国寺展」
- 友の会創立30周年記念懇親会

県美ご出身の方々が5名も参集してくださいました。懐かしい写真を見ながら歓談できました。

友の会 これからの活動予定

日時未定ですが企画展鑑賞会なども計画中です

これからの展覧会のご案内

Paul Klee
パウル・クレー展
創造をめぐる星座　2025.1.18 ― 3.16

友の会入会のご案内

詳しい活動内容を知りたい方、入会をご希望の方は事務局（右記）までお問い合わせください。入会のご案内パンフレットやホームページでも詳しく紹介しております。ぜひご覧ください。

受付場所　★愛知県美術館10階受付
★友の会事務局　★振込も可

愛知県美術館友の会
〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目13-2
愛知県美術館内（愛知芸術文化センター11階）
info@apmoa-tomo.com
ホームページへのアクセスはこちらから
愛知県美術館友の会　検索
apmoa-tomo.com
tel. 052-971-5511（代）
fax. 052-971-5617
（火・木　11:00~15:00）
@apmoafriends